

## 災害対策にもジェンダー視点をお忘れなく！

国立女性教育会館では、男女共同参画推進を目的とする研修事業を行っていますが、中には「災害対応研修」もあります。今回は、災害対応とジェンダー平等にどんな関係があるのか、ご紹介します！

災害は忘れた頃にやってくる…はずでしたが、最近では年に何度も日本各地が大災害に見舞われるようになりました。なんとか被害を最小限にとどめようと、国や自治体も災害対策に力を入れていますが、その際にゆめゆめ忘れてはならないのが、ジェンダーの視点です。「災害対策にまでジェンダー？」と思われるかもしれませんが、近年の被災経験から、性別によって災害の影響は異なることがわかってきました。

**東日本大震災時に女性が抱えた困難 | 女性たちの声**

- 物資をもらうにも、小さな子どもたちを抱えていかなければならず、大変だった (シングルマザー)
- 避難所で、夜になると男の人が毛布の中に入ってくる。・・・周りの女性も「若いから仕方ないね」と見て見ぬふりをして助けてくれない (20代女性)
- 避難所の威圧的な空気の中で、女性や立場の弱い人々が要望を出したり、発言するのは難しい
- 車と仕事を流され、失業保険は延長されたが、もともとの給料が低いので暮らしていけなかった。女性には仕事が無かった。がれき処理は男性向けだった。 (シングルマザー)
- DVで離婚調停中の夫が避難所に探しに来て、気持ちが落ち着かなかった。
- 自分も友達も生理用品が無い事に困った。トイレトーパーを使うしか無かった (10代女性)
- 市の窓口には女性の人はいなかった。男性が配ったり、周りに男性がたくさんいる中で支援物資の生理用品を受け取りに行くのが恥ずかしかった (10代女性)

出典：  
『東日本大震災における支援活動の経験に関する調査』 東日本大震災女性支援ネットワーク 調査チーム  
『聞き取り集：40人の女性たちが語る東日本大震災』イコールネット仙台  
『東日本大震災；被災地の若年女性調査と提言 Tohoku Girls' Voices』 オックスファム・ジャパン

出典：内閣府男女共同参画局「男女共同参画の視点からの防災研修」  
[https://www.gender.go.jp/policy/saigai/bosai\\_kenshu.html](https://www.gender.go.jp/policy/saigai/bosai_kenshu.html)

例えば、阪神淡路大震災での兵庫県の死者数は、女性が男性の1.4倍に上っていたことが報告されています。古い木造長屋等の倒壊で一人暮らしの高齢女性が多数犠牲になっており、経済力の有無が災害リスクに直結することが露わになりました。東日本大震災では、多くの男性の飲酒量が増えていた、という統計が出ています。仕事中心の生活を送ってきた男性たちが、被災によって役割と居場所を喪失し、孤立に陥っていることが心配されるデータです。また、被災地の女性相談にはさまざまな声が寄せられました。「避難所には生理用品もなく、治安の悪さに毎晩不安を抱えて過ごした」「家族のケア負担が増大して職場復帰できなかった」「DVを受けているが非常時だから我慢している」等々。このような悩みは災害時の「皆一丸となってこの難局を乗り切ろう」という雰囲気の中では、なかなか口に出せません。地域や家庭で立場が弱い女性たちは、復興にも立ち遅れてしまいます。

災害時には社会構造の歪みが凝縮して現れます。男はこう、女はこう、というジェンダーの縛りがきつい日本社会では、性別による格差は文字通り致命的に作用します。弱いところが一層弱くなるのです。いま、コロナ禍で「女性不況」と呼ばれる激しい雇用悪化や家庭責任の増大に追い詰められ、女性の自殺者が急増しているのも同じ道理です。

では、どのような対策を整えておけばよいのでしょうか？ 平常時から、それぞれの事情に応じたニーズに対応しつつ、社会のあちこちに潜むジェンダー格差を積極的に是正していくことです。災害が起きてからでは間に合いません。

まずは、災害対策を考える場の構成を、男女混成にすることから始めるのが得策です。従来、地域防災を担ってきたのは、健康で社会的地位のある男性ばかりでした。そこに女性たちが加われば、一気に知見の幅が広がり、多様なニーズに対応できるようになります。

青森県男女共同参画センターが自主防災組織と協働して行った避難所訓練を見学させていただいたことがあります。地元の中学校も巻き込み、地域の人々が主体的に知恵と力を出し合う見事なしかけになっていて、これは次の災害がやってくる前に青森に引っ越しおこうか…と思うくらいでした。企画・運営は、女性防災リーダー養成講座修了生を含む男女混成チームです。当日のリーダー役や炊事係も単純に性別で割り振ることなく参加者皆で分担し、防災備蓄の品揃えや障害のある方への対応等も検証して、次回の訓練につなげていました。国立女性教育会館では来る10月に、このときセンター長だった方を講師に迎えて「男女共同参画の視点に立った災害対応研修」を行う予定です。

災害対策というと、土木整備や避難計画などが思い浮かびますが、ジェンダー平等も実は大きな要素なのです。過去の貴重な経験を教訓に、平常時からのジェンダー平等を実現して Build Back Better (よりよい復興) を成し遂げていきたいものです。

(丹羽 麻子/独立行政法人国立女性教育会館 事業課 専門職員)



青森県八戸市での防災訓練の様子（撮影：筆者）上：女性がリーダー役となって訓練を進行 下：「この指とまれ」式で男女に関わらず炊事係に